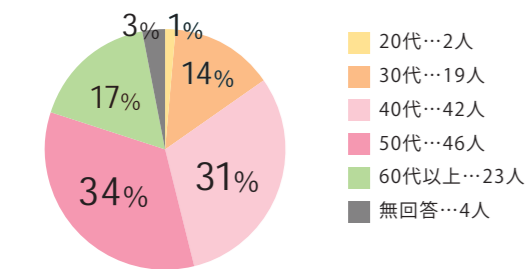
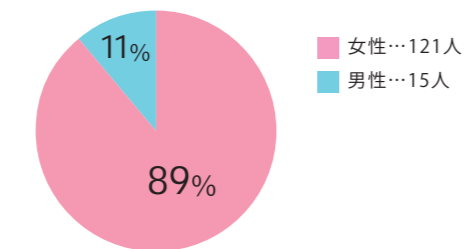


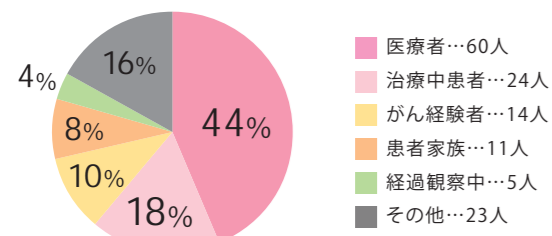
【シンポジウム参加者年齢比率】



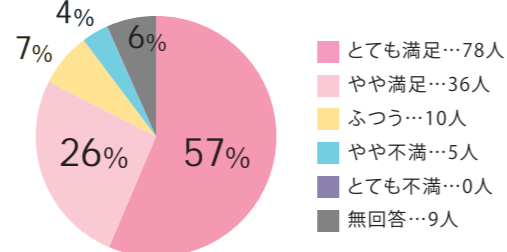
【シンポジウム参加者男女比率】



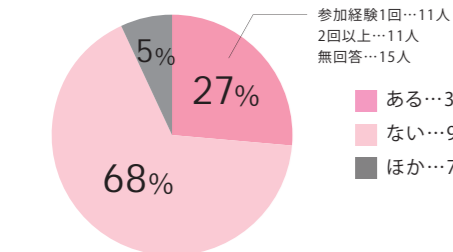
【シンポジウム参加者の立場】



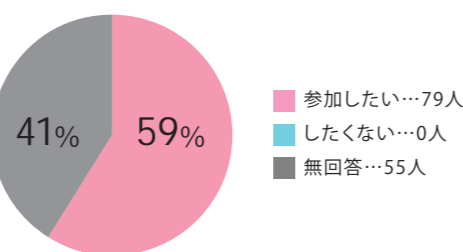
【シンポジウム参加満足度】



【がん哲学外来カフェの参加経験】



【今後参加したいか】



参加者コメント

夫を亡くしたとき、自分の気持ちを話せ、共有できる場所を探しましたが見つかりませんでした。家族の気持ちをケアできる場所をつくってほしいです。(40代 女性 患者家族)

地域で参加できる、このようなシンポジウムがもっと活用され、気軽に参加できるようになればよいと思いました。(50代 女性)

美の心への関与、周囲への支え、医療者として相手になりたいか頭において聴く、一歩踏み出すきっかけを手伝えるようになりたいと思いました。(40代 女性 医療従事者)

治療については様々な情報がありますが、仕事をしている経験者の方がどんな風に生きているか、共有できる集まりを企画してほしいと思いました。(50代 女性 会社員)

心の中で表現できない内容を形にいただけた気がします。日常の診療をより良いものにするためにがん哲学外来のエッセンスにもっと触れたいと思いました。(女性 60代 主婦)

普段、話をきくことのできない方々の体験談や生き方について聞くことができ、考え方・生き方について見直す機会が得られたように思います。(30代 女性 医療従事者)

医療従事者の皆さまへ



シンポジウムの収録動画は、
WEBサイトからご覧いただけます。



<http://www.katsura-ladys.com/aboutsv/symposium0416/>

市民公開シンポジウム

がん哲学外来

～ 純度の高い専門性と丁寧な大局観 ～

開催レポート

収録動画を、
WEBで公開中!

※詳しくは裏面を
ご覧ください。



主催：株式会社スヴェンソン 共催：資生堂ライフクオリティビューティーセンター

後援：一般社団法人がん哲学外来 / ラジオNIKKEI

協賛：がん治療費.COM / キリンビラレッジバリューベンダー株式会社 協力：セコム損害保険株式会社

2016年4月16日(土)

会場：品川プリンスホテル メインタワー17F [オパール]

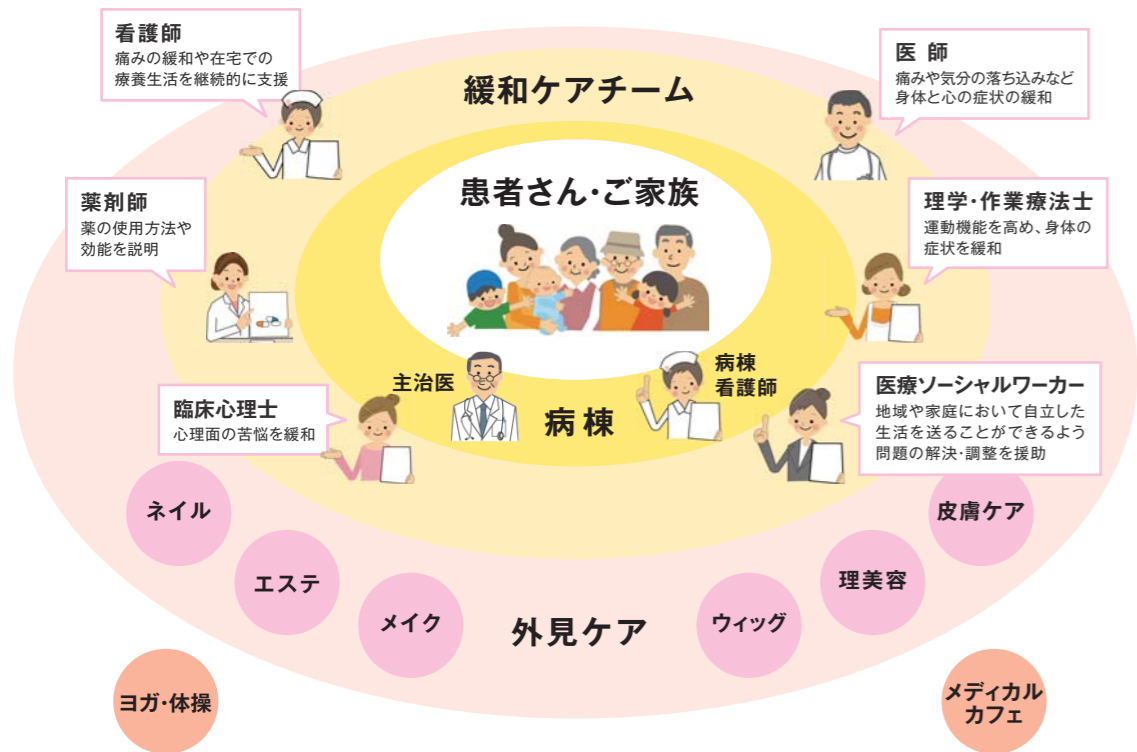
【2016年4月16日(土)】

がん哲学外来市民公開シンポジウム 開催レポート

『がん哲学外来』は2008年よりスタートした対話を通じて患者さんの心をサポートする取り組みです。患者・医療者・家族・サポート企業などが垣根なく集い、考える時間。これからの対話のあり方が見えるシンポジウムとなりました。

地域の生活を支えるこれからのチーム医療。 社会全体で患者さんの生活をサポートする医療イノベーションを。

医療者間の連携から、患者さん・ご家族、医師・看護師・薬剤師、管理栄養士、臨床心理士、ソーシャルワーカー、放射線技師、行政、企業などが連携する時代へ。



第1部

基調講演

埼玉医科大学国際医療センター 精神腫瘍科 教授 大西 秀樹
精神保健指定医 日本精神神経学会専門医

『がん患者さんと関わるために ～私たちができること～』

「がん」という言葉を聞いて皆さん何を感じるでしょうか。医療者では「慢性疾患」だという人もいらっしゃいます。しかし、告知を受けた患者さんの2人に1人が精神疾患と診断されます。人は何か悪い知らせがあると2週間判断力が落ち、その後更に2週間経ち元の生活に戻るとというのが半数の方がとる正常反応です。残りの半数の方は適応障害が鬱病になります。この鬱状態によって『治療をする』『しない』という意思決定が左右されることもありますし、精神的な判断に大きく影響します。医療者が患者に病状説明をする時は、水戸黄門の印籠みたいにべらべら話をして、その印籠の中に毒が入っていて患者が苦しんでしまう。僕は、医療者は喋らず、やっぱり聞くことが大事だと思います。そして一個一個、問題を一緒に整理して対応を考えて書き出してみる。これが一番わかるのは『ニーバーの祈り』の言葉にある

「変えることのできるものについて、それを変えるだけの勇気を与えてください。変えることのできないものについては、それを受け入れるだけの冷静さを与えてください、そして変えることのできるものとできないものを見分ける知恵を与えてください」。私たちはこのお手伝いをする。がんは勝ち負けではなく「負ける」と思った気持ちの本当の意味は何なのか、それを一緒に考えること、人間の心は成長するものなのです。 [つづきはWEB動画をご覧ください](#)

東海大学医学部 血液・腫瘍内科教授
がん幹細胞研究センター長 銀座メディカルカフェ顧問 安藤 潔

以前は本人にがんであることを告知しませんでした、この20年で告知する時代になりました。しかし、その患者さんを周りが支える社会の仕組みがまだ整えられていないように思います。「言葉にすることの大切さ」は、死生観を考えることにつながり、「死を考える」ことは、生きている意味を考えることにつながります。患者さん・ご家族がそのような話をできる場所として、「がん哲学外来」があると思います。2025年には75歳以上の方が人口の多くを占める時代が訪れる中、日本人にとって死生観を考えることはますます大切になってくると思います。 [つづきはWEB動画をご覧ください](#)



第2部

パネルディスカッション

『純度の高い専門性 ～美容哲学～』

さまざまな立場の女性から治療中のQOL (quality of life: 生活の質) に欠かせない「心と外見の関係性」についてお話しいただきました。



ファッションデザイナー
コシノ ジュンコ

健康な時には健康に気が付かないし、病気になると途端に考え方が変わります。今日に感謝です。将来から見ると今日が一番若いですし、一番元気です。私は友人である、姿を感じました。

エッセイスト・ノンフィクション作家
桐島 洋子

体の調子が悪くなってきても、それは人生が成長している証で、悪くない事だと感じます。がんというのは養老のある哲学的な病気だと思います。

人財育成・開発コンサルタント
里岡 美津奈

私は41歳の時、乳がんで右の乳房を全摘出しました。色々な経過を経て今があり、「死」というものを意識して生きる喜びを知りました。告知を受けたとき「この1ページにおきた出来事であって、誰が悪いわけでもない。だから受け入れま

し、病気になることは大事です。私は友人である、姿を感じました。

れは人生が成長しています。がんという

房を全摘出しました。「死」というものだから受け入れま

資生堂 ライフクオリティビューティーセンター
Makeup Carist

澤田 保子

肌や外見上に深い悩みがあると、人は社会との関わりに消極的になってしまいます。化粧で外見をととのえることで元の自分を取り戻し、笑顔になっていた

関東労災病院 外科部長 川崎駅前 がん哲学外来・カフェ 世話人

秀村 晃生

医療者やご家族、そして企業がそれぞれに患者に寄り添うこと、それががん哲学外来の担うべきことだと思います。

株式会社スヴェンソン 東日本エリアマネージャー

根岸 ゆきえ

がん哲学外来カフェをサポートする企業として、もっと患者様・医療者様に利用いただき、この輪が広がっていくと嬉しく思います。

[つづきはWEB動画をご覧ください](#)



総括

閉会挨拶

順天堂大学医学部 病理・腫瘍学教授 医学博士 一般社団法人 がん哲学外来理事長 樋野 興夫

「心配するのは1日1時間でいい」、この意味わかりますか？人間本当に心配をする時は、一人部屋に閉じこもって心配するんですよ。この習慣は良いことです。何かに困ったとき相談したり理解してほしいとアクションをとってはいけません。一人静かに、1日1時間部屋に閉じこもることです。大変なことです。人間は人生に期待をするから、失望するんです。人生から期待されていると思わないと。どんな人にも役割や使命があって、その役割に気づけば『人生から期待される』。

人と比較してはだめです。みんなジェラシーとか、人との比較で悩んでいる。人間は苦しみを通して忍耐を身につけ、忍耐が生ずると品性が出ます。品性が出ると、本当の希望が与えられます。何が良いか、悪いかはわからないよ。もしかすると、この時のために人生があるから。

[つづきはWEB動画をご覧ください](#)



開会挨拶

株式会社スヴェンソン 代表取締役社長 児玉 義則

医師・看護師・ボランティアの方々に支えられ、弊社サロンをがん哲学外来メディカルカフェ開催場所として提供させていただき、今年で4年になります。二人に一人ががんにかかる時代、より一層対話の場を広げる活動を、企業としてサポートしてまいります。

[つづきはWEB動画をご覧ください](#)



第1部